

## 中学生の「ゆとり」経験について（1）

—いつ、どんな場面で「ゆとり」を感じ、その時の気分はどうか—

西野 仁（東海大学）

### I、はじめに

文部科学省は2002年より公立学校の完全学校週5日制を決めた。その流れは、1992年に具体化し、まず月1回の土曜休校からはじまった。そして、1995年4月より、現行の月2回へと拡大された。ねらいは、学校生活にもっと「ゆとり」を持たせようということである。この教育制度の大改革によって、児童・生徒の週間リズムは、従来の「6 and 1（6日登校1日休み）」から、「5 and 2（5日登校2日休み）」との併用へと大転換することになる。いずれ、この改革に対する評価が求められるようだが、そのためには、まず、「ゆとり」経験の実態をしっかりと把握しておく必要がある。つまり、いつ、どんな場面で「ゆとり」を感じているのか、その時の気分はどうかなどのデータを適切な手法で収集・分析しておくことが求められる。

そこで、本研究者は、首都圏に住む高校生を対象に、1996年に一週間にわたり Experience Sampling Method（経験標本抽出法、以下ESMと略す）を用いて調査研究を開始した。

（Nishino, 1997；西野・知念, 1998；西野, 1998；西野, 1999）さらに、1999年から日本学術振興会科学研究費（課題番号11680054）の補助を受けて、中学生を対象に同様な調査研究を実施した。本研究は1999年12月から2000年12月にかけて収集した10校418名から得た11317件の中学生の日常生活経験のサンプルを使って、中学生の「ゆとり」経験を記述することをめざした。

### II、研究の目的と方法

#### 1. 研究の目的

本研究は、中学生の一週間の授業以外の日常生活において、どのような場面で「ゆとり」を感じているかを明らかにすることにある。具体的には、生徒が「ゆとり」を感じているのは「いつ」「なにを」「どこで」「だれと」している時か、また、「ゆとり」を感じている時の「気分」はどうかについて記述することである。

#### 2. 研究の方法

ESMを用いて、データを収集した。ESMは、覚醒時の「日常生活経験」を母集団とし、そこから「経験の標本」をランダムに抽出し、そのサンプルデータを分析して、人の日常経験を推測しようとする調査方法である。（西野・知念, 1998）

調査は、首都圏の中学校10校で行った。調査は学校長の許可を得て、2年生の調査協力者を募り行った。調査に参加した生徒は505名であったが、あらかじめ決めておいたデータ数の基準に満たなかった87名の生徒のデータを除外し、残りの418名を分析の対象とした。その内訳は、男子194名（46%）、女子224名（54%）であり、やや学業成績が上位の生徒が多い傾向にあった。

調査は、1999年12月から2000年12月にかけて行った。調査協力者の呼び出しは、アラーム付き腕時計（カシオデータバンク）で、午前7:00から午後10:59までの間に、2時間毎にランダムに1回対象者を呼び出すことを原則に、木曜日から翌週水曜日までの一週間連続して行った。しかし、授業中に呼び出しすることを学校側に了解されなかったため、授業中は、呼び出しを行わなかった。集まったデータからさらに、呼び出しから2時間経過して記入されたデータを除外し、最終的に分

析対象としたデータは11317件である。

調査票の回収後、複数のコーダーにより相互にチェックしながら、活動内容と活動場所についてコード化した。ゆとり感の指標とした「ゆとり気分スコア *yutori feeling score*」は、7段階の質問項目「あなたは、どの程度ゆとりを感じていましたか？」に「まさにそう感じていた」との回答を7点、逆に「全くそうは感じていなかった」を1点とした。ムードスコアなどの計算と分析は、統計プログラムSASを用いた。

### Ⅲ、結果および考察

#### 1. ゆとり感の日内変動と週間変動

土、日曜の週末と、それ以外の平日とでは明らかにゆとり感の変動パターンが異なった。休日は一日の変化の範囲が平日よりも小さかった。平日は、朝、ゆとり感の低い状態からスタートし、昼食時に最も高くなった。放課後にはいったん下がるが、また高まりだし、その傾向は就寝前まで続いた。日曜日は、一日の変化の範囲が平日よりも小さかった。また、朝からゆとりを感じており、夜に高くなった。

#### 2. 活動とゆとり感

ゆとり感を感じていた活動は、読書、テレビやラジオの視聴、ゲームをしている時や外出時などの「レジャー活動時」と、うたた寝や食事をしている「生活維持活動時」であった。

#### 3. 場所とゆとり感

ゆとりを感じている代表的な場所は、自宅の「浴室」と「居間」、「友人宅」、そして「図書室」であった。「カラオケボックス・ゲームセンター・遊園地」、「文化施設」、「野外活動施設」などもゆとりを感じやすい場所であるようだ。逆にゆとり感を感じにくい場所は、「塾・予備校」であった。

#### 4. 同伴者とゆとり感

最もゆとりを感じるのは、「家族といる時」であった。次いで「一人でいる時」、「友人といる時」と続き、「教師といる時」が最も低かった。

#### 5. ゆとり感の高い時と低い時の気分の違い

ゆとり感の高い時と低い時とでは、ゆとり感が高い時は、いわゆるポジティブな「安定」「自由」「リラックス」「やすらぎ」などの気分が強く、逆にゆとり感の低い時は、「たいくつ」「いやな」「いそがしい」などのネガティブな気分であった。

#### 参考文献

Nishino, H. (1977) Will the two-day weekend bring more leisure (*yutori*) for Japanese Adolescents? Thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy in Leisure Studies in the Graduate College of the University of Illinois.

西野・知念、(1998)、E S Mを用いた日常生活におけるレジャー行動研究の試み、レジャー・レクリエーション研究第38号：1-15、

西野、(1998)、高校生の「ゆとり経験について」—いつ、どんな場面で「ゆとり」を感じ、その時の気分はどうか—、レジャーレクリエーション研究第39号、50-53、

西野、(1999)、高校生の「ゆとり経験について(2)」—「ゆとり」感とそれを感じている活動に対する考え—、レジャーレクリエーション研究第41号、28-31